

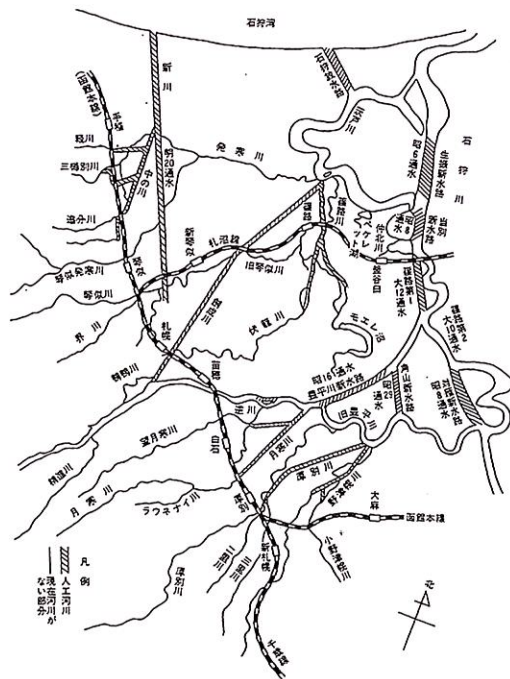
特別寄稿

スウオロとサリポロペツ

篠路整形外科
池本 吉一

筆者が、今から 50 数年前の小学校 2 年生の時に、札幌市立札幌小学校の南側の校門から見ていた伏古川が、まさか、江戸時代にサリポロペツに起きた大洪水により、当時は大河であった伏古川の流れが、大きく東にずれ、今の豊平川の流れになったことなど知る由もなかった(図-1)。筆者が子供のころ、この校舎の周りには、見渡す限りの玉葱畑が悠然と広がっていた。その中を蛇行して流れる伏古川に向かって傾斜が連なり、冬ともなれば、ランドセルを前向きに抱えるようにしてそり遊びに興じたものだった。その伏古川は、私が、札幌中学校に進学し

札幌の河川改修の様子



まっぼろ文庫24「札幌と水」による

図 1

ても、その校舎の大きなグラウンドの南側を境となすように大きな支流をなし、流れていたものだった。さらに遡ること 1000 年以上前の平城京遷都の頃に、北区のほぼ中央を蛇行するように大きな流れをしていたサクシュコトニ川(旧琴似川)があった。現在でも北海道大学の構内の中央ローンを流れているが、その川の流れは、今では街並みに隠れているが、新川、麻生へと連なり、篠路で伏籠川へと合流していた(図-2)。明治時代に行われた発掘調査によって、この川に沿って 800 もの住居跡が発見された。石器を使わなくなり、ナイフなど鉄器を使い始め、その川を遡上してくるサケを取るなどの狩猟採取の他に、農耕を本格化してきた擦文時代があった(図-3)。その後、室町時代に入るところからアイヌの時代へと移っていった。これら 2000 年を越える歴史の中、篠路 5 条 10 丁目の龍雲寺付近で、これらの 2 つの川のエピソードの点が、1 つの線へと繋がり、そこには北区唯一の保存樹木でもある大銀杏がある。樹齢 100 年以上はあるその樹は、秋ともなると、黄金色に色づき、今でも人の目を楽しませている(図-4)。この合流地点の流れに「鍋を浸しておく所」という意味のアイヌ語で「スウオロ」が篠路の、一方、豊平川は、今もそうであるように、「その葦原が・広大な・川」という意味のアイヌ語「サリ・ポロ・ペツ」が札幌の語源になっているという。札幌の開拓は、北区から始まっている。石狩浜を中心に、石狩川河口にむけて大河の流れは、拓北、茨戸、花畔と大きく蛇行して石狩湾に注いでいる。この流域に沿った石狩十三場所とい



図 2 北大構内中央ローンを流れるサクシュ琴似川

札幌市略年表

年号	札幌市の沿革	国内の主な出来事
16000年前	旧石器文化	
8000年前	縄文文化(丘陵部に多くの人々が生活する)	
0~7世紀	統縄文文化(現在の市街地まで生活の範囲が拡大)	倭奴国王、後漢に遣使、光武帝の印綬を受く(57年)。
8~13世紀	擦文文化(植物園、北大から麻生まで集落が広がる)	平城京遷都(710年)。源頼朝が鎌倉幕府を開く(1192年)。
13世紀~	アイヌ文化(現在の札幌市域にアイヌ民族が生活する)	足利尊氏が室町幕府を開く(1338年)。
寛文9年(1669)	アイヌ民族と和人との戦いに関する津軽藩の記録に、札幌市域に首長ヨウウタイン、チクナシの二つの勢力があったことを記す。	徳川家康が江戸幕府を開く(1603年)。
元禄13年(1700)	松前藩、幕府に松前島絵図を呈上。製作年代のはっきりしている地図で札幌地域の地名が載った最初。	赤穂浪士の仇討(1702年)。
元文年間(1736~40)	石狩十三場所に場所請負制導入。	徳川吉宗、享保の改革(1716~1745年)。
宝暦2年(1752)	材木商飛騨屋久兵衛、石狩山で伐木を開始。札幌市域は伐出場所と河口の木場をつなぐ交通の要路。	
文化4年(1807)	東蝦夷地の幕府直轄(1799)に続き、西蝦夷地も幕府直轄に。石狩十三場所のアイヌ民族の人口2,285人(西蝦夷地日誌)、この後、労働力の強化や抱落の流行のために減少の一途をたどり、安政元年(1854)には670人(蝦夷日誌)。	外国船打払令(1825年)。
安政4年(1857)	発寒村に「在住」入居。「札幌越新道」(銭函~豊平~千歳~勇払)開削を行う(後、志村鉄一、吉田茂八、豊平川の通行屋守となる)。	ペリー、浦賀に来航(1853年)。
5年	早山清太郎、琴似で稲作を開始。松浦武四郎、温泉(後の定山溪温泉)発見、後、早山清太郎・美泉定山などが経営。	日米修好通商条約締結。安政の大獄が始まる。
万延元年(1860)	石狩役所調役荒井金助が自費で農夫を募り篠路に入植させる。	桜田門外の変。

図 3

われる場所で、江戸時代の元禄のあたりより、アイヌと本州との間で、主に舟で活発に交易が行われていた(図-5)。本州からは、酒、米、衣類、鉄器、北海道からは、サケなどの海産物、

熊・鹿の皮が交換されていた。この石狩付近に、江戸時代末期に入ると鎖国政策をとる日本の周りに欧米各国の艦隊がしばしば姿を現し、徳川幕府は、国を守るという観点より、当時、北海

略年表

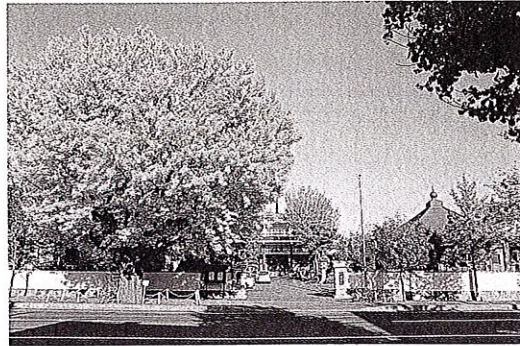


図 4 龍雲寺のイチョウ



図 5 明治初期の石狩港の様子

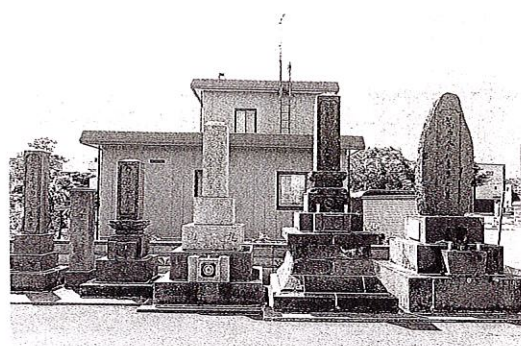


図 6 向かって、右から、荒井金助、早山清太郎両氏の墓



図 7 明治 4 年ごろの篠路村



図 8 図 7 の平成 14 年現在の様子(この向側に龍雲寺がある)

8)。一方、明治政府は、蝦夷地の守りを固め開拓を進めたため、2代目開拓使判官の岩村通俊の手によって、当時原始林だった札幌に基盤の目のような道路が作られ、明治6(1873)年には、西洋式の建物の開拓使本庁舎が、現在の北海道庁の赤レンガ庁舎のところに完成された

道は、蝦夷地と呼ばれていたが、その行政を転換せざるを得ない状況に追い込まれた。寛政11(1799)年、蝦夷地の直轄を始め、文化4(1807)年には、松浦武四郎らが蝦夷地の探索をするようになり、北方のロシアに相対するための本拠地として、交通条件の良い今の札幌辺りに注目するようになった。丁度、この頃、石狩役所調役荒井金助が、農家8戸を篠路に入植させ、すでに宮の森付近に入植していた早山清太郎は、荒井金助の求めに応じ、篠路の地を調査、万延元(1860)年に、現在の篠路駅付近を拠点にして、90歳でこの地で死亡するまでの間、開墾、耕作に、開拓移民の指導者的役割を果たすこととなった(図-6)。明治2(1869)年になると、荒井村と隣接地の中島村が一つになり、篠路村が誕生した。その2年後に、早山清太郎が名主となり、以後10数年にわたり、私財をなげうつなどして篠路一札幌間、篠路一茨戸間など、札幌北部に、20余本の道路を築き上げた(図-7、

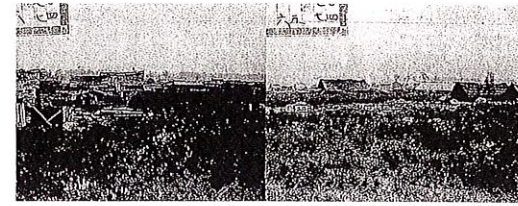


図 9 明治 5 年の札幌西南部(北 1 条東 1 丁目より西を眺めたもの)



図 10 明治 5 年の札幌西北部(北 4 条東 1 丁目の開拓使仮庁舎の望楼より西を眺めたもの)

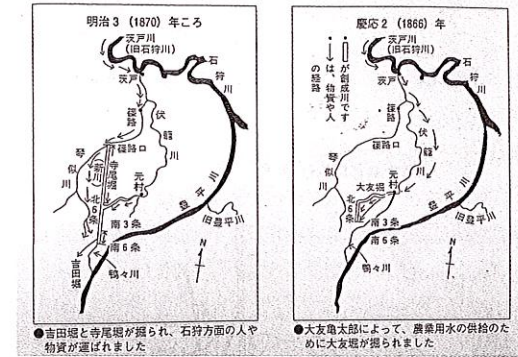


図 11

(図-9, 10)。その建物など建設の為の物資や人手を本州より運び込んだが、当時は道路などは整備されておらず、もっぱら水上輸送で、篠路を中継拠点に、伏籠川、旧琴似川を伝わって、札幌中心部の方に運び入れられた(図-11)。その頃より、札幌は、その辺りに、狸小路をはじめとする商店や工場など、さらには、北海道大学の前身の札幌農学校も建ち始め、爆発的な発展を遂げていくのである(図-12, 13, 14, 15)。北区には、明治維新によって失業し生活に困っていた士族も多数移ってきていた。明治4年、岩手県の大友村から旧南部藩士10戸が伏籠川の中流に移住してきた。現在の「十軒」地区の始まりである。明治15年には、旧福岡藩士の黒田



図 12 西から創成構を望む(明治 18 年ごろの南 1 条西 1 丁目通り)



図 13 明治 45 年ごろの狸小路 3 丁目より東を望む。左手旗が見えるのは遊楽館



図 14 土堀で囲まれた薄野遊郭街(明治初期)

武士 50 戸 175 人が現在の石狩川沿いの篠路清掃工場がある付近に移住している。「福移」の名の由来である。この頃には、民間の開拓会社も出来て、福岡県の人々が作った「報国社」という会社が、現在、百合が原公園付近、烈々布と呼ばれていた地区に出来たり、福移には「開墾社」も出来た。明治7年には、「屯田兵制度」が作ら

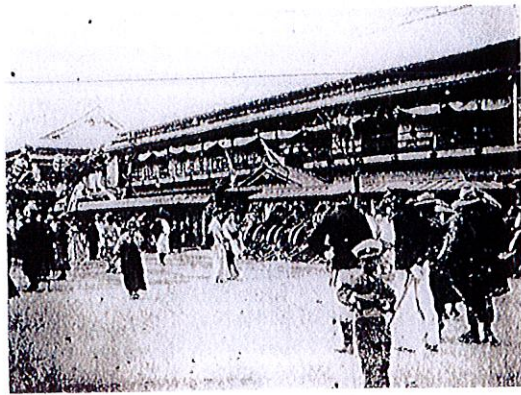


図 15 人力車が並ぶ薄野の高砂楼(明治 40 年ころ、左手は昇月楼)

れ、北海道の警備と開拓を行うため、日本全国から家族ぐるみの移住が進められた。明治 8 年には、東北地方の士族 198 戸が琴似に、翌年には 240 戸が山鼻に、明治 20、21 年には九州土族を中心に 220 戸が新琴似に入植、明治 22 年には、篠路(現・屯田)に 220 戸が移住し、札幌本府を囲むように、4 つの屯田兵村出来上がった。明治の初期は、農作物は少なく、生活に必要な物資のほとんどを本州から船で運び、小樽や石狩に陸揚げした。石狩からは、物資を丸木船に乗せ、石狩川から伏籠川を遡って元村(現・東区)まで運び、そこから市の中心部までは馬や人が運ぶほか、新たに掘られた「大友掘」と呼ばれた運河を使って運ばれた(図-11)。石狩街道が道らしくなったのは、明治 19 年の創成川の工事で、川を掘った土で盛り上げてからである。しかし、湿地帯だったため、雨のあとは、大変な悪路になり、何度も砂利を入れては流されることが繰り返された。これら豊平川、旧琴似川、伏籠川の影響もあり、年に 2 回、春の雪解けや秋の台風の際、必ず北区全体は水害を繰り返すほか、今現在もそうであるように、多雪、厳冬により、交通は寸断され、さらには、熊、バツタの大群被害の連続で、開拓は困難を極めた。明治 13 年、日本で 3 番目の鉄道は、札幌-小樽間で開業され、昭和 9 (1934) 年には、札幌-小樽線が開通、昭和 2 (1927) 年には、西 5 丁目通りに市電が走り始めた(図-16)。昭和 30 (1955)

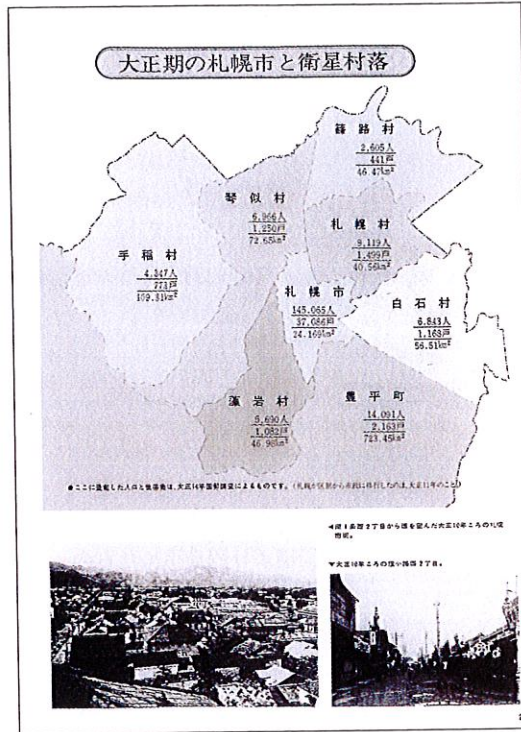


図 16

年、私の生まれた年ですが、琴似町、篠路村、札幌村が合併し、札幌市に、昭和 36 年には豊平町と、更に昭和 42 (1967) 年には、手稲町と合併した。篠路区内でも、田畑、牧草地が急速に住宅地になり始め、おりしも、モータリゼーションの波が押し寄せ、一層道路が整備、舗装され、マイカーの時代に突入。昭和 47 (1972) 年の札幌冬季オリンピックの前年、地下鉄南北線が開業すると、さらに札幌市は大都市に生まれ変わり始めた。150 年前に、僅か 8 戸で入植した荒井、早山氏の夢を乗せた、あのイチョウの木の下の新ロフトの地は、今なお発展を続けているのである。

(以上の文章は、平成 26 年 7 月発行の札幌通信の緑陰随筆、平成 27 年 1 月発行の新春随筆に、平成 26 年 11 月発行の北区かわらばんの表紙絵に加筆、編集し直したものです。) (平成 27 年 3 月 記載)